

薬事情報センターに寄せられた質疑・応答の紹介（2012年9月）

【医薬品一般】

Q：低カリウム血症の治療で、カリウム補給に使用するカリウム剤の使い分けは？（薬局）

A：急速なカリウムの点滴静注は不整脈や静脈炎を引き起すため、緩徐な補正が原則で、カリウムの補給は経口投与を第1選択とする。経口カリウム剤には、無機カリウム製剤の塩化カリウムと有機酸カリウム製剤のL-アスパラギン酸カリウムやグルコン酸カリウムがあり、どちらを使用するかは病態によって異なる。低クロライド血症性代謝性アルカローシスや酸・塩基障害を伴わない場合は無機カリウム製剤を使用し、代謝性アシドーシスの場合は、体内で重炭酸イオン（ HCO_3^- ）に変化する有機酸カリウム製剤を使用する。

Q：肺炎球菌ワクチンを5年以上前に接種したが、医師から再接種を勧められた。一生に1回しか接種できないのではないか？（一般）

A：23価肺炎球菌莢膜ポリサッカライドワクチン（ニューモバックスTMNP）の予防効果は5年以上とされているが、接種により上昇した特異抗体濃度は時間の経過とともに低下し、高齢者、呼吸器や循環器に基礎疾患を有する人では低下しやすい傾向にある。抗体水準を維持するためには再接種が必要だが、再接種時は初回接種時に比べ局所副反応が多いとの報告から、過去にわが国で既接種者は「接種不相当者」とされ再接種は認められていなかった。しかし国内外での再接種の安全性に関する知見が集積され、2009年10月より「接種要注意者」となり再接種が可能となった。

「肺炎球菌ワクチン再接種に関するガイドライン」では、高齢者やハイリスク者における必要性の増加を勘案して再接種を推奨している。

（接種対象者）初回接種から5年以上経過した、下記に示す肺炎球菌による重篤疾患に罹患する危険性が極めて高い者及び肺炎球菌特異抗体濃度が急激に低くなる可能性がある者。ただし、再接種時の年齢が10歳以下の②に該当する小児、またはネフローゼ症候群、腎不全、腎移植等の初回接種後に抗体が急速に減少する小児は、前回の接種から3年後に再接種を考慮することを推奨。

① 65歳以上の高齢者

② 機能的または解剖学的無脾症（鎌状赤血球症、脾摘出等）の患者

③ HIV感染症、白血病、悪性リンパ腫、ホジキン病、多発性骨髄腫、全身性悪性腫瘍、慢性腎不全、またはネフローゼ症候群の患者、免疫抑制化学療法（副腎皮質ステロイドの長期全身投与を含む）を受けている患者、臓器移植または骨髄移植を受けたことのある患者

（保険給付の対象）「2歳以上の脾摘患者における肺炎球菌による感染症の発症予防」の目的で使用した場合のみだが、自治体により高齢者等では費用の一部の助成制度がある。

Q：グアヤコールスルホン酸カリウムの薬理作用は？（薬局）

A：グアヤコールスルホン酸カリウムはフェノール系の誘導体で、弱い消毒作用と去痰作用（気道分泌を促進して痰の粘度を低下）を有する。鎮咳去痰を目的に、一般用医薬品のかぜ薬や鎮咳去痰薬に配合されている。

【安全性情報】

Q：健康食品のイチョウ葉エキスを使用中の患者が手術予定だが、どのくらい前に使用を中止したら良いか？（病院薬局）

A：イチョウ葉エキスに含有のテルペンラクトンのギンコライドは、PAF（血小板活性化因子）の拮抗作用を有し、血小板凝集抑制および血栓形成抑制作用があり、出血時間が延長する可能性がある。手術時の出血リスクを予測するためには、血小板凝集抑制作用や抗凝血作用の強度や発現機序および体内動態のデータが必要だが、イチョウ葉エキスはこれらのデータが不明のため、医薬品のように手術前の中止期間を詳細に設定することは困難である。手術予定者は少なくとも36時間前からの中止を勧める文献もあるが、米国麻酔学会では、手術の際に注意すべきサプリメントは、術前2～3週間は摂取を避けることを推奨している。

Q：C型肝炎の患者が滋養強壮用のドリンク剤を飲用して良いか？（薬局）

A：C型慢性肝炎では鉄の代謝障害等が起るため鉄過剰をきたしやすい。鉄過剰状態では、鉄が2価から3価になる時に過酸化水素と反応してフリーラジカルが多量に発生し、細胞膜障害やDNA障害を引き起し、肝炎の進展や肝がんの発生に関与していることが示唆されており、C型慢性肝炎の治療で瀉血療法や鉄制限食事療法（6mg/日以下）が行われることがある。滋養強壮用のドリンク剤の中には鉄を多量に含むものがあるため、含有量を確認し、鉄の過剰摂取にならないように注意が必要である。

Q：糖尿病患者がグルコサミンを使用して良いか？（薬局）

A：グルコサミンは糖の一種で、グルコース（ブドウ糖）にアミノ基が付いたアミノ糖であり、動物の皮膚や軟骨、甲殻類の殻のキチン質に含まれている。糖尿病患者がグルコサミン塩酸塩またはグルコサミン硫酸塩を使用して血糖値が上昇した報告があるが、高齢の2型糖尿病患者を対象としたプラセボ対照二重盲検ランダム化試験では、1日にグルコサミン塩酸塩1,500mgとコンドロイチン硫酸1,200mgを90日間摂取しても、HbA1cに有意差はなかった報告もあり、糖尿病患者に対する安全性の評価は一定していない。ただし、グルコサミンはインスリン分泌やインスリンによるグルコースの取り込みに関与しているため、代謝障害を引き起しコレステロール値や血圧の上昇を誘発するおそれもある。糖尿病、高脂血症、高血圧のリスクがある人は、血糖値や血清脂質、血圧を定期的に測定し、変動に注意しながら使用する。

【その他】

Q：二硫化炭素でミツバチの巣箱を掃除するらしいが、方法は？（薬局）

A：ミツバチの家畜伝染病であるスムシ（ハチノスツヅリガの幼虫）の駆除に、二硫化炭素による薫煙法が行われていたが、平成16年の改正農薬取締法施行により現在は使用禁止となっている。代替法として、マイナス20℃で4時間以上の冷凍処理やドライアイスでの密封処理等が行われている。

Q：猫の糞害を防ぐ方法は？（薬局）

A：確実な方法は猫が侵入しないように侵入口や通路を塞ぐことで、塀を隙間のないアルミ製やスチール製に変えたり、棘のあるカラタチ、ヒイラギ等を植える、猫が入り込む隙間を金網やネットで塞ぐ等、また、超音波やブザーが鳴る機器を取り付ける等の対策を取る。猫の忌避方法には以下のものがあるが、個体差もあり、効果が持続しない場合や反復継続が必要な場合が多く、定期的に種類を変更する。また臭いが強いものもあるので、あらかじめ近所の人への説明が必要である。

①猫が嫌う臭いを散布：食酢・木酢酢，塩素系漂白剤（濃いめに希釈），タバコの吸い殻水（ニコチンが浸み出した水，誤飲に注意），コーヒー粕，ニンニク・トウガラシ（細かく切る），米のとぎ汁（研ぎ始めの濃い汁），ミカン等の柑橘類の皮，市販の忌避剤等

②猫が嫌う植物を植える：ドクダミ，ゼラニウム，タマネギ，ニンニク，トウガラシ，ミカン等の柑橘類，チャイブ等

Q：X線検査の1年間の検査回数等に制限はあるか？（薬局）

A：X線検査の放射線量（被曝線量）は検査部位や手技によって異なるが、非常に低線量で、放射線の被曝による健康影響はほとんどないとされている。特定の医療目的のために適切な線量レベルで利用される放射線は、リスクよりベネフィットを多くもたらす重要な手法であるため、患者の医療被曝に関する法的規制はない。しかし、わが国の医療被曝線量が諸外国に比べ高いと指摘されていること、また、同一検査でも医療機関によって被曝線量にバラツキがあること等から、適正に放射線診療を実施するため、「放射線診療における線量低減目標値 医療被曝ガイドライン2006」（日本放射線技師会，現日本診療放射線技師会）で、X線検査や核医学検査等の線量低減目標値が設定されている。